

東京外語会主催 文化講演会

イタリア作家たちとの出会いーゼロ年代を超えて

講師：和田忠彦 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

日時：9月6日（土）午後2時—4時（続いて懇親会）

場所：東京外国語大学本郷サテライト4階



講師紹介

- 1981年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学後、京都大学、名古屋芸術大学、神戸市外国語大学で活躍。1999年東京外国語大学外国部学部教授、2009年同大学副学長、現職へ。主な著作に『ヴェネツィア水の夢』（筑摩書房、2000年）、『声、意味ではなく わたしの翻訳論』（平凡社、2004年）、『ファシズム、そして』（水声社、2008年）、Giappone e Italia, Le arte del dialogo, Casa editrice Emil di Odoya srl,（共編著、2010年）、「世界古本探しの旅」朝日新聞社（共著、1998年）など。2012年『イタリア共和国、2011年度国家翻訳大賞（個人部門）』を受賞。

<講師からのメッセージ>

イタリア現代文学の研究者として、そして翻訳紹介者として、同時代を生きる作家や詩人たちと直に交流するようになって、かれこれ40年になる。気づいたら、すでにこの世を去った者たちも少なからずいて、思うに任せぬ我が仕事ぶりのもどかしいこと限りない。

とはいえ、日本とほぼ同時期に近代化の道を歩みはじめたイタリアが、なぜいまでも文学のみならず芸術全般において刺激的かつ魅力的でありつづけるのか——その答えをわたし自身の経験（翻訳と研究、出遭いと別れ）に照らしながら探してみよう。

イタロ・カルヴィーノ、ウンベルト・エーコ、アントニオ・タブッキ——訳者として友人として交流をつづけてきた作家たちを窓口に、21世紀のゼロ年代を終えたいま、この千年紀においてもなお、わたしたちを惹きつけるイタリア文学と芸術、文化の底力を素描してみたい。